

第五調

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて主日の讚頌を歌ふ、第五調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。
ハリストスよ、爾は尊き十字架にて悪魔を辱しめ、復活にて罪の蝨刺を鈍くし我等を死の門より救ひ給へり。獨生子よ、我等爾を讚榮す。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
人類に復活を賜ふ主は羊の如く屠幸の爲に牽かれたり。地獄の君は之を畏れ、悲の門は擧げられたり、蓋光榮の王ハリストスは入りて、縛に在る者に出でよ、幽暗に在る者に顯れよと言へり。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
大なる奇跡や、見えざる者の造成主は、人を愛するに因りて、身に苦を受け、不死の者は復活せり。諸民諸族來りて、之に伏拜せん、蓋其恵に因りて、我等は迷より脱れて、三位にして惟一なる神を歌ふを習へり。

又讚頌、アナトリイの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が捧の聲を聴き納れん。
我等暮の伏拜を爾暮れざる光に奉る、爾は世の季に、鏡に於けるが如く、身に藉りて世界に耀き、地獄にまで降り、彼處にある幽暗を破り、復活の光を諸民に顯し給へり。光を施す主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人
第五調 「スポタ」の大晩課 五
第五調 「スポタ」の大晩課 六

の爾の前に敬まん爲なり。
我等はハリストス我が救の首を讚頌す、蓋彼死より復活せしに、世界は迷より救はれたり、天使の軍は歡び、悪魔の誘は去り、墜ちたるアダムは起き、ディアウォルは空しくせられたり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。
番兵は不法の者より教えられたり、ハリストスの復活を匿せ、銀を受けて云へ、我等が寝ねたる時、死者は墓より竊まれたりと。誰か之を見たる、誰か何時か死者の竊まれしを聞きたる、況や其香料を傳られ、裸體になり、斂葬の衣を墓に遺したるをや。イウデヤ人よ、惑ふ母れ、諸預言者の言を學びて、彼が實に世界の贖罪者及び全能者なるを悟れ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
地獄を虜に、死を滅しし主、尊き十字架にて世界を照しし我が救世主よ、我等を憐み給へ。

又生神女の讚頌、アモレイのパワエルステイヒラの作。第五調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。
至淨なる者よ、爾は諸造物より最高き者にして、實にヘルウィムの如き寶座と爲れり、蓋神の言は我等の像を興さんと欲して爾の内に入り、身を以て爾より出でて、我等

の爲に十字架の苦を受けて、神として、我等の變ぜられたる性、曾て定罪せられし者に復活を賜へり。故に神の母よ、我等は爾の子を造成主として、彼に審判の時に我等に赦免と矜憐とを賜はんことを祈る。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

潔き神の母よ、我何を以て爾の至榮なる教會を稱せんか、エデムの園とせん、ノイの舟、即神の爲に王たる司祭班、聖なる人民、ハリストス我が神の會を救ひし者とせん。爾をモイセイの約櫃に譬へん、其内に贖罪所及び華を生ぜし杖あり、燈臺、「マンナ」の壺、及び金の香爐あり、凡の信者は之に趨り附きて、大なる憐を求め得るなり。

句、蓋が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

獨冀望を失ひし者の冀望、佑助なき者の爲に備はりたる佑助、仁慈を施す主イイススを生みし潔き者よ、今我が劣弱を憐み、我が思情に傷感を與へ、我が涙の流を以て我が罪の淵を涸らし、我が無量の慾の暴風を鎮め、我が亂れたる心を神聖なる平穩に充てて、ハリストスに我が諸罪の全き赦を賜はんことを祈り給へ。

第五調 「スボタ」の大晩課 七

第五調 「スボタ」の大晩課 八

光榮、今も、生神女讃詞。

昔紅の海にて婚姻を知らざる聘女の象記されたり。彼處にはモイセイ、水を分つ者、此處にはガウリル、奇跡に務むる者なり。彼の時イズライリは足を濡らさずして深處を歩み、今童貞女は種なくしてハリストスを生めり。海はイズライリの渉りし後元のまま過られず、玷なき者はエムヌイルを生みし後元のまま玷なし。永遠にして最永遠なる者、人となりて現れし神よ、我等を憐み給へ。

次ぎて「穩なる光」。堤綱、「主は王たり」。其他常例の如し。

挿句に主日の讃頌、第五調。

爾身を取りたれども、天を離れざりし救世主ハリストスを歌の聲を以て讃め揚ぐ。蓋爾は人を愛する主なるによりて、我が族の爲に十字架と死とを受けて、地獄の門を破り、三日目に復活して、我等の靈を救ひ給へり。

又讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり

生を施す主よ、爾は脅を刺されて、衆人の爲に赦免と、生命と、拯救とを流し、身を以て死を受けて、我等に不死を賜ひ、墓に入りて我等を釋き、神として己と偕に至榮に復活せしめ給へり。故に我等呼ぶ、人を愛する主よ、光榮は爾に歸す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

人を愛する主よ、爾が十字架に釘せらるると地獄に降ることは奇妙なり、蓋爾は地獄を虜にして、古世よりの俘囚を神として己と偕に至榮に復活せしめ、樂園を啓きて、彼等を其中に入れ給へり。故に爾の三日目の復活を讃榮する我等にも罪の洗淨を與へて、樂園に居る者と爲らしめ給へ、爾は獨仁慈なる主なればなり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

我等の爲に身にて苦を受け、三日目に死より復活せし仁愛の主よ、我が肉欲を醫し、我等を甚しき諸罪より起して救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

いととおと どうていじょ なんじ でんおよ もん みやおよ おう ほうざ わ しよくざいしゅ き
最尊き童貞女よ、爾は殿及び門なり、宮及び王の寶座なり。我が贖罪主ハリストス、義
のひたる主は其手を以て己の像に從ひて造りし者を照さんと欲して、爾に依りて闇冥
に眠る者に現れ給へり。故に讃め歌はるる者よ、彼の前に母の勇敢を獲たる者

第五調 「スポタ」の大晩課 九

第五調 「スポタ」の晩堂課 一〇

として、我等の靈の救はれんことを恒に祈り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

トロボリ
讃詞、第五調。

信者よ、父と聖神と偕に始なき言、吾が救の爲に童貞女より生れし者を讃め歌ひて拜む
べし、彼甘じて其身にて十字架に上り、死を忍び其光榮の復活にて死せし者を復活せし
め給ひしに因る。

生神女讃詞

とお しゅもん よろこ なんじ はし つ もの かき おおい よろこ おだやか みなと こんいん
通られぬ主の門よ、慶べ、爾に趨り附く者の垣牆と幘幘よ、慶べ、穩なる湊よ、婚姻
を識らずして、身に爾の造成主及び神を生みし者よ、慶べ。爾の産を讃め歌ひて拜
む者の爲に息めずして禱り給へ。

主日の早課

六段の聖詠終りて「主は神なり」、第五調に依りて歌ひ、後主日の讃詞、「信者よ、父と
聖神と偕に」、二次。光榮、今も、生神女讃詞、「通られぬ主の門よ、慶べ」。次に聖詠經
の常例の誦讀。

セダレン
第一の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第五調。

われら 主の十字架を讃め揚げ、聖なる葬を尊み歌ひ、其復活を崇め讃めん、彼は神と
して、死の權と悪魔の力とを奪ひて、死せし者を己と偕に墓より起し、地獄に在る者に光
を輝かしたればなり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

主よ、爾は死者と稱へられて死を滅し、墓に勵められて墓を空しくせり。上には兵卒柩
を守り、下には爾古世より死せし者を復活せしめ給へり。全能にして悟り難き主よ、光榮
は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

かみ とお たま せいざん よろこ や い いばら よろこ ひとり せかい ため かみ ゆ はし
神の通り給ふ聖山よ、慶べ、焼かれざる生ける棘よ慶べ、獨世界の爲には神に往く橋、
死者を永遠の生命に渡す者よ、慶べ、潔き童貞女、夫を識らずして我等の靈の救を
みし者よ、慶べ。

セダレン
第二の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第五調。

主よ、爾が三日目の復活及び使徒の伏拜の後に、ペトル爾に呼べり、女等は勇敢を現
ししに、我は畏れたり、盜賊は爾を承け認めしに、我は諱みたり。是より爾我を招きて門徒
と爲すか、抑我を復海上の漁者と爲すか。求む、神よ、痛悔する我を納れて、我を救
ひ給へ。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

主よ、不法者は爾を定罪せられし者の中に十字架に釘して、戈を以て爾の脅を刺せり。
嗚呼慈憐の者よ、爾は葬を受けて、地獄の門を破り、三日目に復活し給へり。女等爾

を見ん爲に趨り附きて、使徒等に復活を知らせたり。尊み崇めらるる救世主、天使等の歌ふ者、崇め讃めらるる主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

第五調 主日の早課 二七

婚姻に與らざる聘女、神の母、エワの悲を喜に變ぜし者よ、我等信者は歌ひて、爾に伏拜す、蓋爾は我等を古の詛より脱れしめたり。至聖にして讚美たる者よ、今も我等の救はれんことを息めずして祈り給へ。

應答歌、第五調。

天使の顯見にて心驚かされ、神妙の復活にて靈照さるる攜香女は使徒に福音せり、異邦の中に復活を傳へよ、主は奇跡を以て佑けん、我等に大なる憐を賜ふ主なればなり。

品第詞、第五調。第一偈和詞。毎句復唱す。

我が救世主よ、我愛の中にダウイドの如く爾に歌う、我が靈を欺騙の舌より免れしめ給へ。

野に居る者の生命は福なり、彼等は神聖なる愛に勵まさる。

光榮

聖神にて見ゆると見えざる者は悉く保たる、彼は實に聖三者の一にして、全能の主なればなり。今も、同上。

第二偈和詞

靈よ、山に上らん、彼處に往け、蓋助は彼處より來る。

ハリストスよ、願はくは爾の右の手は我にも觸れて、凡の邪曲より我を護らん。

光榮

聖神に向ひて讚美して曰はん、爾は神なり、生命なり、愛なり、光なり、睿知なり、爾は仁慈なり、爾は世世に王たり。今も、同上。

第三偈和詞

人我に向ひて、主の家に往かんと云ふ時、我多くの歡喜に盈てられて、禱を獻ぐ。

ダウイドの家に畏るべき事は行はる、蓋火は彼處に凡の耻づべき心を焚く。

光榮

聖神には生命を施す權位あり、凡ての生物は彼を以て活かさる、父及び言を以てするが如し。今も、同上。

提綱、第五調。

主我が神よ、起きて爾の手を擧げよ、爾世世の王なればなり。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

「凡そ呼吸ある者」。句、「神を其聖所に讃め揚げよ」。

順序の早課福音經

第五調 主日の早課 二九

第五調 主日の早課 三〇

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス、獨罪なき者を拜むべし。ハリストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌ひ讃む、爾は我等の神なればなり、爾の

ほか た かみ し ただなんじ な とな しんじや みなきた せい ふっかつ おが
外他の神を知らず、唯爾の名を稱ふ。信者よ、皆來りて、ハリストスの聖なる復活を拜
むべし、十字架にて歡喜は全世界に臨みたればなり。我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇
め歌はん、主は十字架に釘うたるるを忍びて、死を以て死を滅ししに因る。

第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。 光榮
使徒の祈祷に依りて、憐 深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

今も
生神女の祈祷に依りて、憐 深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

次ぎて、第六調。
神よ、爾の大なる 憐 に因りて我を憐み、爾が惠の多きに因りて我の不法を抹し給へ。

讃頌
預め言ひし如く、イイスス墓より復活して、我等に永遠の生命と大なる 憐 とを賜へり。

「神よ、爾の民を救ひ」高聲、「爾が獨生子の仁慈と慈憐と」。
規程四篇、主日の、讃詞四章、十字架復活の、三章、生神女の、三章、月課經の、四章。
若し聖人の祭ならば、聖人の、六章、十字架復活の、二章、生神女の、二章。

主日の規程、第五調。

第一歌頌

イルモス、強き手にて 戦 を滅す ハリストス は馬と騎者とを 紅 の海に落し、凱歌を歌
ふ イズライリ を救ひ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。
ハリストス よ、棘を生ずる エウレイ の會は爾恩主に母たる愛を守らずして、棘を爾
先祖の棘の禁戒を釋く者に冠らせたり。
生命を賜ふ ハリストス、罪なき主よ、爾は傾きて我奔に陥りし者を起し、朽壞に與ら
ざる者にして我が悪臭の朽壞を忍びて、我を神の性の香料にて薫らせ給へり。

生神女讃詞

詠は釋かれ、悲は息みたり、蓋祝福せられし童貞女、恩寵を蒙れる者は四極の爲に
祝福たる ハリストス を花の如く生じて、信者の爲に喜を耀かし給へり。

又十字架復活の規程

第五調 主日の早課 三一
第五調 主日の早課 三二

第一歌頌、同調

イルモス、「我等は民に足を濡らさずして」。
甘じて身にて十字架に釘せられ、木に縁りて陥りし者を古の定罪より釋きたる主、
獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。
死して墓より復活せし ハリストス、陥りし者を己と偕に起して、父と同座するを以て之
を榮せし主、獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

生神女讃詞

至淨なる神の母より身を取りて、父の懷を離れざりし神に、其造りし者を凡の患難よ
り救はんことを絶えず祈り給へ。

又至聖なる生神女の規程、其冠詞は、光を生みし童貞女よ、我を照し給へ。

第一歌頌 同調

イルモス、「強き手にて戦を滅す」。

至淨なる母童貞女よ、爾に入りて神性の光線を以て世界を照しし光たるハリストスに、凡そ爾を歌ふ者を照さんことを祈り給へ

諸徳の華美に飾られたる者として、爾恩寵を蒙れる至淨なる童貞女は聖神の光照に藉りて、靈妙の華美たる萬有を飾りし主を受け給へり。

童貞女よ、昔シナイに於て棘は爾を預象して、火に合せられて焚げざりき、蓋爾童貞女は生みて童貞女に止まり、母にして智慧に超えて童貞女なり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、己の命にて虚しき處に地を固め、保ち難く重き者を懸けしハリストス、獨仁慈にして人を愛する主よ、爾が誠の動かざる石に爾の教會を堅く立て給へ。

ハリストスよ、恩を知らざるイズライリの諸子、磐より蜜を吮ひし者は爾野にて奇跡を行ひし主に臆を捧げ、「マンナ」の恩に代へて醯を酬いたり。

昔光れる雲に覆はれたる者は生命たるハリストスを墓に置きたり、然れども彼は己の權を以て復活して、上より衆信者に奥密に蔭へる聖神の光照を賜へり。

生神女讃詞

神の母よ、爾は婚姻に與らず、母の産苦を知らずして、永在の父より輝きし者を生み給へり。故に我等は正しく爾を生神女と傳ふ、身を取りし言を生みたればなり。

又イルモス、「ハリストスよ、爾の十字架の力にて」。

第五調 主日の早課 三三

第五調 主日の早課 三四

生命を賜ふハリストスよ、爾は墓より復活して、甘じて受けし爾の十字架の死を歌ふ者を死の朽壞より救ひ給へり。

ハリストスよ、攜香女は香料を爾の身に傳らん爲に急ぎしに、爾に遇はずして還りて、爾の復活を歌頌せり。

生神女讃詞

潔き者よ、爾の胎より身を取りし主に、爾潔き童貞女を歌ふ者を悪魔の誘惑より脱れしめんことを絶えず祈り給へ。

又イルモス、「己の命にて虚しき處に」。

潔き者よ、爾は今明に衆に、至上者が朽ちたる性を新にせん爲に我等に降りし梯と見られたり、蓋爾に藉りて至仁の主は甘じて世界に共興し給へり。

純潔なる童貞女よ、昔預定せられ、世々の先に知らざる所なき神に預見せられたる奥密は、今末の時に於て爾の胎内に成就せられたり。

至淨なる童貞女、獨人人の裝飾たる者よ、爾の中保に依りて古の詛の定罪は釋かれたり、蓋爾より主は現はれて、至仁の者として衆に祝福を流し給へり。

第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、アウワクムは先知の目にて爾が神妙の謙遜を悟り、戦きて爾に呼べり、爾の民を救ひ、爾の膏つけられし者を救はん爲に來り給へり。

仁慈なる主よ、爾は木を以てメルラの最苦き水を甘くして、罪の味を滅す爾の至淨なる

じゅうじか かたち もつ よしやう たま
十字架を形を以て預象し給へり。
わ きゆうせいしゅ なんじ ちしき き か じゅうじか あま しょく か い う し きゆうかい か
我が救世主よ、爾は智識の木に代へて十字架、甘き食に代へて膽を受け、死の朽壤に代
へて爾の神聖なる血を流し給へり。 生神女讃詞
なんじ こんいん あずか いさぎよ たいない ほら さんく み かみ う のち どうていじよ
爾は婚姻に興らずして潔く胎内に孕み、産苦なく身にて神を生み、生みて後童貞女と
して護られたり。

又 イルモス、「我十字架の力の風聲」。
じゅうじか ちじょう されこうべ ところ た じごく もん やが よよ かどもり よ しゅ
十字架が地上に髑髏の處に樹てられしに、地獄の門は壞られ、世の門衛は呼べり、主
よ、光榮は爾の力に歸す。
きゆうせいしゅ ししや ごと しは もの くだ こせい ししや かれ とも ふつかつ よ
救世主が死者の如く縛られし者に降りしに、古世よりの死者は彼と偕に復活して呼べり、
主よ、光榮は爾の力に歸す。 生神女讃詞
どうていじよ う はは さんく し はは な どうていじよ とど われら かれ うた
童貞女は生みて、母の産苦を知らざれども、母と爲りて童貞女に止まれり。我等彼を歌ひ
て呼ぶ、生神女よ、慶べ。

第五調 主日の早課 三五

第五調 主日の早課 三六

又 イルモス、「ハリストスよ、アウワクムは先知の目にて」。
いさぎよ どうていじよ われけいけん いだ ところ ちえ たましい くち もつ なんじ まこと しょうしんじよ う と
潔き童貞女よ、我敬虔を抱きて、心と智慧、靈と口を以て爾を眞の生神女と受け認
め、救の果を獲て、爾の祈祷に由りて救はる。
じゅんけつ もの けい わ ぼんぶつ つく もの おんしゅ なんじいさぎよ もの つく もの よみ たま
純潔なる者よ、無より萬物を造りし者は、恩主として爾潔き者より造らるるを嘉し給
へり、信と愛とを以て爾を歌ふ者の救の爲なり。
じゅんけつ むてん どうていじよ てんじやう ひんい なんじ さん うた なんじ まこと しょうしんじよ う と
純潔無玷なる童貞女よ、天上の品位は爾の産を歌ひて、爾を眞の生神女と受け認む
る者の救の爲に悦ぶ。
いさいや なんじ つえ な これ われら ため うるわ はな かみ しょう
イサイヤは爾を杖と名づけたり、是より我等の爲に美しき花たるハリストス神は生ぜ
り、信と愛とを以て爾の旃幪の下に趨り附く者の救の爲なり。

第五歌頌

イルモス、光を衣の如く衣る者よ、我爾に朝の禱を奉りて爾に呼ぶ、ハリストスよ、我
が昧まされし靈を照し給へ、爾は獨仁慈の主なればなり。
こうえい しゅ けんぴ のかたち おい あまん はず き かか われら ため しんせい こうえい
光榮の主は謙卑の形に於て甘じて辱かしめられて木に懸る、我等の爲に神聖なる光榮の
事を言ひ難く慮るに因りてなり
こと い がた おもんぼか よ
ハリストスよ、爾は朽つるなく身にて死の朽壤を嘗め、三日目に墓より輝き出でて、我
に不朽を衣せ給へり。 生神女讃詞
しょうしんじよ なんじ われら ため しょうぎおよ しくざい たね う げんそ せい のろい
生神女よ、爾は我等の爲に稱義及び贖罪たるハリストスを種なく生みて、原祖の性を詛
より釋き給へり。

又 イルモス、「主よ、我等夙に興きて」。
われら きゆうせいしゅ なんじ き て の しゅう おのれ め たま ひと あい しゅ
我等の救世主よ、爾は木に手を伸べて、衆を己に召し給へり、人を愛する主なればな
り。
わ きゆうせいしゅ なんじ おのれ ほうむり じごく とりこ おのれ ふつかつ しゅう よろこび み たま
我が救世主よ、爾は己の葬にて地獄を虜にし、己の復活にて衆を歡喜に満て給へ
り。
いのち たま しゅ なんじ みつかめ はか ふつかつ しゅう ほろ ふし なが たま
生命を賜ふ主よ、爾は三日目に墓より復活して、衆に滅びざる不死を流し給へり。

生神女讃詞

しょうしんじよ われら なんじ さん のち どうていじよ もの うた なんじ み せかい ため かみことば う
生神女よ、我等爾を産の後に童貞女たる者として歌ふ、爾は身にて世界の爲に神言を生

みたればなり。

又 **イルモス**、「光を衣の如く衣る者よ」。
潔き生神女よ、衆預言者は明に爾を神の母たらん者として預言せり、蓋爾は獨全
く純潔無玷の者として獲られたり。
潔き者よ、我等爾を活ける水を含む光明なる雲、我等望を失ひし者の爲に不朽の雨
たるハリストスを降しし者と知り。

第五調 主日の早課 三七

第五調 主日の早課 三八
爾全く純善無玷にして潔く童貞に封印せられし者を神は愛して、爾の内に入り給へ
り、獨仁慈なる主なればなり。

第六歌頌

イルモス、主宰ハリストスよ、靈を壞る颯風に荒らさるる慾の海を鎮めて、我を淪滅より
援け給へ、爾は仁慈の主なればなり。
主宰ハリストスよ、禁ぜられたる糧を食して、朽壤に陥りし原祖は爾の苦に因りて
生命に升せられたり。
主宰ハリストスよ、爾は生命にして地獄に降り、朽壤せしめし者の爲に朽壤と爲りて、
朽壤に由りて復活を流し給へり。
童貞女は生めり、生みて後實に潔き者として止まれり、己の手に萬物を持つ主を抱き
し童貞女母なればなり。

生神女讃詞

又 **イルモス**、「主よ、淵は我を圍み」。
ハリストス我等の神よ、爾は己の手を伸べて、遠く散じたる爾の諸民の會を爾の生
を施す十字架を以て集め給へり、人を愛する主なればなり。
爾は死を虜にし、地獄の門を壊れり、縛られたるアダムは釋かれて爾に呼べり、主よ、爾
の右の手は我を拯ひ給へり。
光榮なるマリヤ、正教者の美譽よ、我等宜しきに合ひて爾を焚かれぬ棘及び山、活け
る梯及び天の門として讚榮す。

生神女讃詞

又 **イルモス**、「主宰ハリストスよ、靈を壞る颯風」。
純潔なる神の母よ、萬有の緣由にして、萬有に存在を賜ひし主は我等に似たる身を取ら
んと欲して、爾を其緣由として有ち給へり。
純潔なる女宰よ、我等爾を、信を以て至榮なる岬嶺の下に趨り附く者の爲に醫治の泉、
靈を養ふ者なりと知る。
爾は我等、爾を眞の生神女として傳ふる者の爲に、贖罪の緣由たる生を施す主、永遠
の救を賜ふ者を生み給へり。

小讃詞、第五調。

我が救世主、人を愛する主よ、爾は地獄に降り、全能者として其門を壞り造成主として
死者を己と偕に復活せしめ、死の刺を折き、アダムを詛より釋き給へり。故に我等皆呼
ぶ、主よ、我等を救ひ給へ。

同讃詞

女等は天使の聲を聞いて涕泣を止め、喜び且戦けり、驚くべき事を見たればなり。視

第五調 主日の早課 三九

よ、ハリストスは彼等に近づきて曰へり、喜べ、勇めよ、我は世に勝てり、囚囚を釋きたり。急ぎて門徒に往きて彼等に報ぜよ、我爾等に先だちてガリレヤに往かん、教を授けん爲なりと。故に我等皆爾に呼ぶ、主よ、我等を救ひ給へ。

第七歌頌

イルモス、尊まるる先祖の主は焰を滅し、少者を涼しくせり、彼等心を合せて、神よ、爾は崇め讃めらると歌へばなり。

爾は身に蔽はれて、之を釣の餌として、爾の神たる力を以て蛇を釣り、神よ、爾は崇め讃めらると歌ふ者を升せ給へり。

大地の通り難き固體を造りし容れられぬ主は地中に穿ちたる墓に身にて藏めらる。我等皆彼に歌ふ、神よ、爾は崇め讃めらる。 **生神女讃詞**

純潔なる者よ、爾は二性に於て一位たる身を取りし神を生み給へり。我等皆彼に歌ふ、神よ、爾は崇め讃めらる。

又 イルモス、「火の爐の中に歌へる少者を」。

十字架の木を以て偶像の迷を解きたる我が先祖の神は崇め讃めらる。

死より復活して、地獄に在る者を己と偕に起しし我が先祖の神は崇め讃めらる。

己の死を以て死の權を滅ししハリストスよ、爾我が先祖の神は崇め讃めらる。

生神女讃詞

童貞女より生れて、之を生神女と爲しし我が先祖の神は崇め讃めらる。

又 イルモス、「尊まるる先祖の主は」。

限なき者は變易せずして仁慈の主なるに因りて、爾至聖なる者の内に其位を以て身に合せられたり。彼唯一の我が先祖の神は崇め讃めらる。

女宰生神女よ、我等同心に爾を純潔なる聘女及び爾の造成主の寶座として讃榮す。

我等皆彼に歌ふ、神よ、爾は崇め讃めらる。

童貞女よ、爾は神に潔められて、萬有の王、爾を造りし者の母と爲り給へり。我等皆彼に歌ふ、神よ、爾は崇め讃めらる。

至淨なる神の母よ、主は爾より取りし身の衣を衣て、我を救ひ給へり。我等皆彼に歌ふ、神よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、少者は爐に在りて爾萬物を造りし主の前に全世界の詠隊と爲りて歌へり、

悉くの造物は主を歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

ハリストス、爾は自由なる救の苦の爵の爲に、之を不自由なる者の如くにして祈れり、各二の性に屬する二の望を世世に有てばなり。

ハリストスよ、爾の全功なる降臨に因りて辱かしめられたる地獄は古世より誘惑を以て殺しし者を悉く吐き出せり。彼等爾を萬世に崇め讃む。

生神女讃詞

童貞女よ、爾智慧に超えて神の言に因りて主を生みて童貞女に止まりし者を我等造物皆讃頌して、萬世に崇め讃む。

又 イルモス、「世世の前に父より生れし子」。

あまん じゅうじか て の し なわめ た かみ しさい ら うた ひとびと ばんせい
甘じて十字架に手を伸べて、死の縲綯を断ちしハリストス神を司祭等は歌へ、人人は萬世

に崇め讃めよ。
はなむこ ごと はか かがや い けいこうじよ あらわ これ よろこび ほう かみ しさい ら
新娶者の如く墓より輝き出で、攜香女に現れて、之に喜を報ぜしハリストス神を司祭等

は歌へ、人人は萬世に崇め讃めよ。 生神女讃詞
いさぎよ しょうしんじよ なんじ うえ もの あらわ かれら にな しゅ なんじ ほん やど
潔き生神女よ、爾はヘルウィムより上なる者と現れて、彼等が昇ふ主を爾の腹に宿

し給へり。我等人人は無形の者と偕に彼を萬世に崇め讃む。
なんじかみ はは よろこび う いま げんそ かなしみ や ゆえ どうていじよ われら た なんじ うた
爾神の母が喜を受けしに、今原祖の悲は息みたり。故に童貞女よ、我等絶えず爾を歌

ひて、萬世に崇め讃む。
どうていじよ むけい われら とも あい もつ いつ えいかい な なんじ さと がた さん うた これ
童貞女よ、無形の會は我等と偕に愛を以て一の詠會を爲して、爾の悟り難き産を歌ひて、之

を世世に崇め讃む。
しょうじよ なんじ ふし どうめい いずみ ばんゆう しゅ い しん もつ なんじ うた ばんせい あが
少女よ、爾より不死の透明の泉たる萬有の主は出でて、信を以て爾を歌ひて、萬世に崇

め讃むる者の汚を滌ふ。
どうていじよ われら なんじ じつ しんせい ひか ほうざ およ おんちよう せきばん みと なんじ ちち ことば う
童貞女よ、我等爾を實に神聖なる光れる寶座、及び恩寵の石板と認む、爾は父の言を受

けたればなり。我等彼を萬世に崇め讃む。

次ぎて生神女の歌を歌ふ。「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルウィムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、イサイヤ祝へよ、童貞女は孕みて、子エムマヌイル、神及び人なる者を生めり、
その な ひがし われら くれ あが どうていじよ ほ あ
其名は東。我等彼を崇めて、童貞女を讃め揚ぐ。
しゅさい なんじ おちい ひと どうていじよ たいない う まった これ あわ
主宰ハリストスよ、爾は陥りし人を童貞女の胎内より受けて、全く之に合せられたり、
ただひとつ つみ あずか なんじ おのれ しじょう くるしみ もつ まった ひと きゅうかい と たま
惟一の罪にも與らざりき。爾は己の至淨なる苦を以て全き人を朽壞より釋き給へ

第五調 主日の早課 四三

第五調 主日の早課 四四

しゅさい なんじ しじょう いのち ほどこ わき なが しんせい よ ぐうざう
主宰ハリストスよ、爾の至淨にして生を施す脅より流れし神聖なる血に由りて、偶像の

祭りは息み、全地に爾に讚美の祭を獻ず。 生神女讃詞
じゅんけつ むてん しょうじよ なんじ う もの むけい かみ たら またつね ひと たら すなわちかんぜん ひと
純潔無玷なる少女よ、爾の生みし者は無形の神に非ず、亦常の人に非ず、即完全なる人

にして、實に完全なる神なり。我等彼を父及び聖神と偕に崇め讃む。

又 イルモス、「爾悟り難く解き難く」。

なんじ じゅうじか くるしみ う し もつ じごく ちから やぶ しゅ われら しんじや ちゅうしん あが ほ
爾十字架に苦を受けて、死を以て地獄の力を壊りし主を我等信者は忠信に崇め讃む。
なんじ みっかめ はか ふっかつ じごく とりこ せかい てら しゅ われら しんじや ころろ いつ
爾三日目に墓より復活し、地獄を虜にして、世界を照しし主を我等信者は心を一にし

て崇め讃む。 生神女讃詞
しょうしんじよ かみ はは よろこ なんじ う しゅ いの しん もつ なんじ うた もの しょうせい
生神女、ハリストス神の母よ、慶べ、爾が生みし主に祈りて、信を以て爾を歌ふ者に諸罪

の赦を賜はんことを求め給へ。

又 イルモス、「イサイヤ祝へよ」。

しょうしんじよ えていどうじよ なんじ いさぎよ ち おっと たね せい こ ばんぶつ ぞうせいしゅ ちち どくせい
生神女永貞童女よ、爾の潔き血より、夫なく種なく性に超えて、萬物の造成主、父の獨生

の子の爲に智慧あり 靈ある身は結成せられたり
しせい はは どうていじよ なんじ し とど がた すすみ とど ちえ こ み がた じつ えいきゅう
至聖なる母童貞女よ、爾は死の止め難き奮進を止めたり、智慧に超えて身にて實に永久

の生命を生みたればなり、地獄は之を呑まんと欲したれども空しくせられたり。

純潔無玷なる者よ、爾の子は主宰の寶座に坐して、爾神聖なる諸徳の金繡の衣にて輝ける者を己の右に立てて、爾に母たる尊貴を賜へり。

神の母よ、爾の産は智慧に超ゆ、蓋爾は夫なくして孕み、童貞女にして生み給へり、生れし者は神なればなり。我等彼を讃め揚げて、童貞女よ、爾を崇め讃む。

共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。早課の差遣詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讃頌、第五調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

主よ、不法の者墓を封じたれども、爾は生神女より生れし如く、墓より出でたり。如何にして爾身を取りしか、爾の無形の天使等は悟らざりき、何時爾復活せしか、爾を守る兵卒は覺えざりき。蓋二ながら研究する者の爲に封ぜられ、信を以て奥密を拜む者の爲に奇蹟と顯れたり。此の奥密を讃頌する我等に歡喜と大なる憐とを與へ給へ。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

世世の閉鎖を壊り、桎梏を截ちし主よ、爾は墓より復活し、裹布を遺して、爾が實

第五調 主日の早課 四五

第五調 主日の早課 四六

の三日の葬の證と爲し、洞の内に守らるる者にして、先だちてガリレヤに往けり。大なる哉爾の憐、悟り難き救世主よ、我等を憐みて救ひ給へ。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

主よ、女等は墓に趨りて、爾我等の爲に苦を受けしハリストスを見んとせしに、來りて、天使を見たり。彼は震ひ移りたる石に座し、彼等に呼びて曰へり、主は復活せり、門徒に告げよ、我等の靈を救ふ者は死より復活せりと。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

主よ、爾は封ぜられたる墓より出でし如く、閉ざれたる門より爾の門徒に入りて、之に爾寛忍なる救世主が身に受けし苦を示せり。爾はダウイドの裔として傷を忍び、神の子として世界を自由にし給へり。大なる哉爾の憐、悟り難き救世主よ、我等を憐みて救ひ給へ。

又讃頌、アナトリーの作。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

主、世世の王、萬物の造成主、我等衆を地獄より釋かんと欲して、我等の爲に身にて十字架に釘せらるることと葬とを受けし者よ、爾は我等の神なり、爾の外我等他の神を識らず。

句、和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

主よ、孰か爾の至りて光明なる奇蹟を測らん、或は孰か爾の畏るべき祕密を傳へん、爾親ら欲せし如く、我等の爲に人と爲りて、爾の權力を顯したればなり。蓋爾の十字架にて盜賊の爲に樂園を啓き、爾の葬にて地獄の門を破り、爾の復活にて衆を富ませり。慈憐の主よ、光榮は爾に歸す。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

香料を攜ふる婦等最早く爾の墓に至りて、爾不死の言及び神に香料を擧らんと望みしに、天使の言に諭されて、喜びて歸り、使徒等に、爾が、萬有の生命よ、復活して世界

に潔淨と大なる 憐 とを賜ひしを 明 に傳へたり。
句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が 悉 くの奇跡を傳へん。
神を受けし墓の番兵はイウデヤ人に謂へり、噫 爾 等の空想なる議定や、限られぬ者を護
らんと試みて 徒 に勞せり、釘せられし者の復活を隠さんと欲して 明 に之を顯せり。
噫 爾 等の空想なる議會や、何ぞ隠されぬことを復隠さんと謀る、寧我等より聞きて、成
りたる事の實なるを信ぜよ。電 の如き天使は天より降りて石を移せり、彼を懼るるに因
りて我等は死せし者の如くなれり。彼は智なる攜香女に呼びて云へり、番兵の死せる如く
なり、封印の啓け、地獄の磔されたるを見ざるか、何ぞ地獄の勝利を空しくし、死の刺を折
きし者を死者の如く尋ぬる。疾く往きて使徒等に復活を福音して、懼なく呼べ、大なる
慈憐を有つ主は實に復活し給へり。

光榮、早課の福音の讃頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり」。大詠頌。

次ぎて復活の讃詞。

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を
滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へり。

次ぎて聯禱。及び發放詞。



聖體禮儀には眞福詞、第五調。

ハリストスよ、盜賊は十字架に在りて爾を神なりと信じ、誠の心より爾を承け認めて呼
べり、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。
我が族の爲に十字架の木に於て生命の花を開き、木に縁る 詛 を枯らしし者を、救世主及
び造物主として同心に讃め歌はん。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。
ハリストスよ、爾は己の死を以て死の力を壊り、古世よりの死者、爾 眞 の神及び我等
の救世主を歌ふ者を己と偕に起し給へり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。
ハリストス、生を施す主よ、尊き女等は爾の墓に來りて、爾に香料を傳らんと欲せ
しに、天使は彼等に現れて呼べり、主は復活し給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて 諸 の悪しき言を言はん時は、
爾等 福 なり。

ハリストスよ、爾は定罪せられたる二人の盜賊の間に十字架に釘せられしに、一人は爾
を誹りて、義に稱いて罪せられ、一人は爾を承け認めて、樂園に入れられたり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。
尊き女等は使徒の會に來りて呼べり、ハリストスは復活し給へり、彼を主宰及び造物主

として伏し拜まん。 光榮、聖三者讃詞。
分れざる聖三者、全功全能なる惟一者、父、子、及び聖神よ、我等 爾 眞 の神及び我等

第五調 主日の聖體禮儀 四九
第五調 主日の聖體禮儀 五〇

の救世主きゆうせいしゅを歌うたふ。 **今も、生神女讃詞。**
活いける神かみの宮みや及みび過とおられぬ門もんよ、慶よろこべ、焚やかれざる火ひの状さまの寶座ほうざよ、慶よろこべ、エムマヌイ
ル、ハリストスホロキメン我等われらの神かみの母ははよ、慶よろこべ。

提綱、第五調。

主しゅよ、爾なんじは我等われらを保たもち、我等われらを護まもりて、斯この世よより永遠えいえんに至いたらん。句、主しゅよ、我われを救すくひ給たまへ、蓋けだし義人ぎじんは絶たえたり。

「アリルイヤ」、主しゅよ、我われ永ながく爾なんじの慈憐じれんを歌うたひ、我わが口くちを以もつて世世よよに爾なんじの眞實しんじつを傳つたへん。
句、蓋けだし我われ言いふ、慈憐じれんは永ながく建たてられたり、爾なんじは爾なんじの眞實しんじつを天てんに固かためたり。

